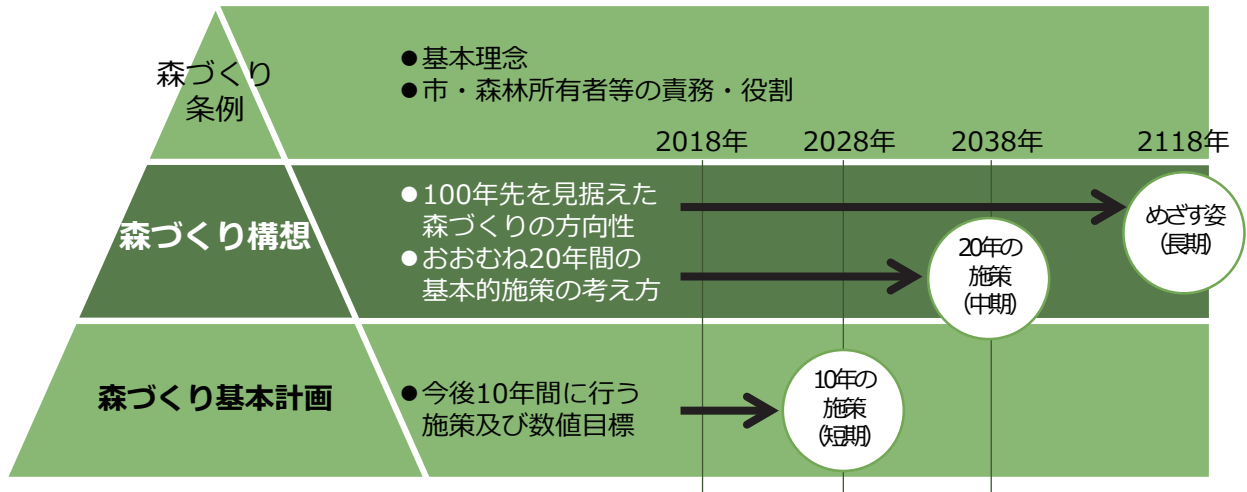




新・豊田市100年の森づくり構想の概要

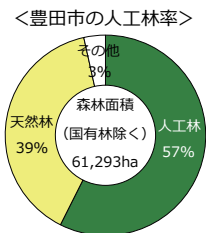
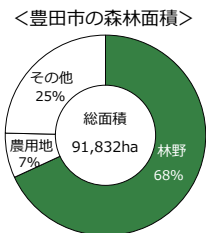
森づくり構想とは？

森づくり構想は、条例で定めた基本理念を実現するため、100年先を見据えた森づくりの方向性とこの先おおむね20年間の基本的施策を示したものです。



豊田市の森林

豊田市は、市域の約7割（約63,000ha）が森林という「森林都市」です。そのうち、国有林を除く森林面積の約57%が人工林です。さらにスギ・ヒノキの人工林は約31,000haを占め、人工林面積の88%に達します。

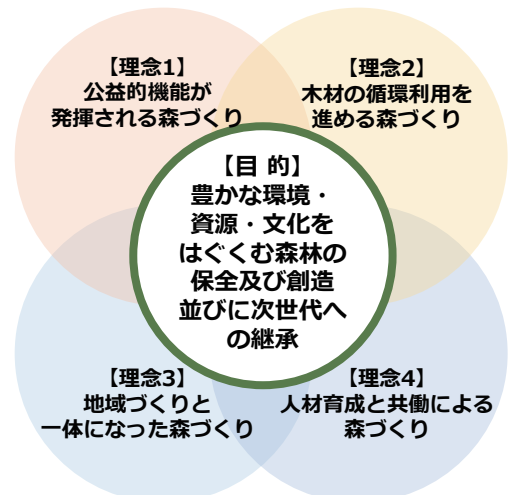


資料：愛知県林業統計 (平成28年度)



森づくりの目的及び4つの理念

森づくり条例は『豊かな環境・資源・文化をはぐくむ森林の保全・創造を推進し、豊かな森を次世代に継承する』ことを目的とし、4つの基本理念に基づき、森づくりを推進します。



豊田市の森づくりの成果と課題、今後の取組の方向性

2008年度以降、豊田市では過密人工林の一掃に向けた間伐の推進などに重点的に取り組み、一定の成果を挙げてきました。

一方で、森林・林業を取り巻く環境は厳しいままです。これまでの取組を継続しながら、さらに強化していくことが求められます。

10年間の成果

- 計画的な間伐による過密人工林の減少
- 地域森づくり会議方式の普及・定着
- とよた森林学校等による森の応援団づくり
- 市の公共施設への木材利用拡大
- 森林の定期的なモニタリング等

継続的な課題

- 材価の低迷（特にヒノキ価格）
- 下げ止まる伐採搬出コスト
- 林業における労働災害事故の発生
- 森林作業員の減少
- 針広混交林化技術の未成熟
- 森林区分（ゾーニング）の未定着 等

新たな課題

- 集中豪雨が全国的に多発
- 国の林業政策の転換（保続から利用へ）
- 木質バイオマス発電の普及や製材工場の大規模化に伴う、全国的な伐採圧の高まり
- 森林保全のための皆伐対策が未整備
- シカなどによる獣害の拡大
- 国・県・市の厳しい財政見通し

今後の取組の方向性

(1) 取組の継続

- 東海豪雨の教訓を踏まえ、公益的機能を発揮する森づくりを重視
- 10年間の成果は今後も継続



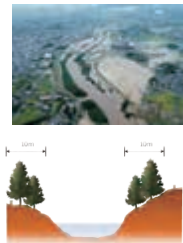
(4) 木材生産・流通の低コスト化

- 素材生産の効率化（作業システムの刷新、路網整備等）
- 中核製材工場稼働を契機とした地域材利用の活性化



(2) 防災機能の強化

- 森林区分（ゾーニング）の再出発
- 急傾斜地や河川（沢）沿いの重要エリアに森林保全のルールを新規設定



(5) 森づくり人材の育成

- 構想実現に必要な知識・技能を備えた林業技術者の育成
- 国内外の林業教育・研究機関との連携を強化



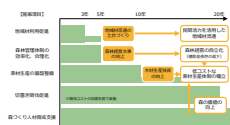
(3) 森の価値の向上

- 将来の目標林型を設定し、将来木施業の導入
- 経済・環境の両面で価値を向上を目指す



(6) メリハリのある森林行政

- 集中取組期間を定め、施策の重点化
- 段階的な仕組みづくりを通して、森林管理コストの通減





新・豊田市100年の森づくり構想のポイント

ポイント1：新しい森林区分（ゾーニング）の設定

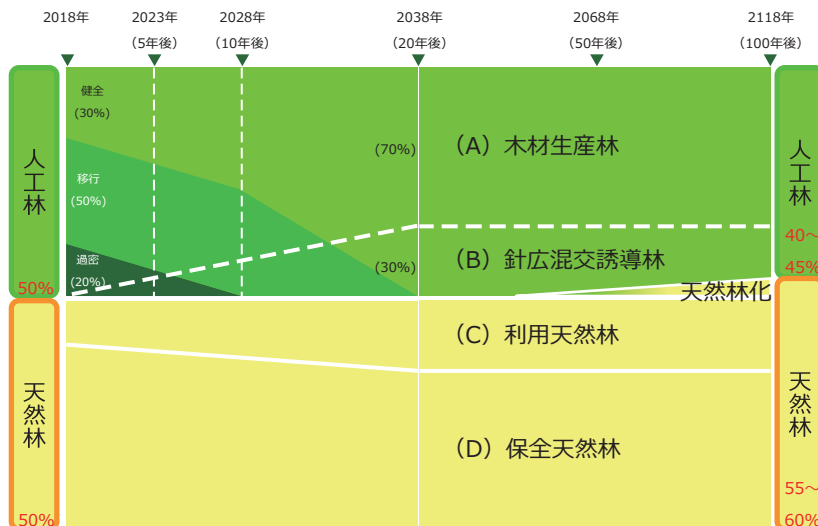
新しい森林区分（ゾーニング）を設定し、公益的機能が発揮される森づくりを継続して推進します。

森林区分記号		(A)	(B)	(C)	(D)
現況		人工林		天然林	
森林区分名称		木材生産林	針広混交誘導林	利用天然林	保全天然林
位置付け		公益的機能を損なわない範囲内で、効率的な作業システムにおいて適時に木材を生産する場所	公益的機能が高く、かつ管理コストの低い森林を目指して、ゆるやかに広葉樹等の導入を図り、針広混交林又は天然林に誘導する場所	所有者に天然林として利活用する意志があり、里山林として利用していく場所、市民講座で開放する市有林等	生態系保全や防災上の観点から天然林のまま保護することが望ましく、自然の植生遷移（必要に応じて保全対策）に委ねる場所
推進基準	立地条件等の特性	木材生産の経済的な立地条件が良く、かつ防災上制約の少ないエリア等	尾根部などで生産不利地や、急傾斜地や河川（沢）沿い、0次谷、脆い地質など防災上重要なエリア等	急傾斜地や河川（沢）沿い、0次谷など防災上重要なエリア以外のエリア等	生態系保全や急傾斜地など防災上の観点から天然林の維持が必要な場所等
	木材生産の適・不適	適地	不適地	—	—
管理基本方針		・通常間伐 ・路網等の基盤整備 ・単層人工林 ・（当面は長伐期施業を想定）	・通常間伐及び強度間伐 ・新規路網整備は極力控える ・既存の広葉樹等を生かし混交林化	・拡大造林はせずに天然林を維持	・自然の植生遷移に依拠
将来（100年後）の森林像		公益的機能の高い人工林	針広混交林又は天然林	天然林	天然林
将来の管理コスト（目標）		中	低	中	低

ポイント2：人工林の整備状況の評価と目標の再設定

おおむね20年をかけて、目標とする森林の将来像へ誘導します。

(A) 木材生産林については、さらに経済性の高い人工林に育成します。尾根部などの林分蓄積の低いエリアや、急傾斜地や河川（沢）沿いなど防災上重要な場所は、(B) 針広混交誘導林として、人工林の間伐を進め緩やかに広葉樹の導入を図ります。なお、その一部は天然林化を目指して、およそ100年後には、現状約50%を占める天然林は55~60%程度まで増加すると想定します。



(注) (A) 木材生産林と(B) 針広混交誘導林の各割合はイメージであり、森林所有者の意向や森林の状況によって増減する。



ポイント3：人工林の目標林型の設定と将来木施業の導入

市の人工林の森林区分（A）木材生産林（B）針広混交誘導林については、森林所有者の意向と現地の状況に応じて、（A）木材生産林は「標準型」と「長伐期型」、（B）針広混交誘導林は「スギ・ヒノキ型」「混交型」と4区分します。

区分ごとに将来目指す森林像（目標林型）を設定し、「将来木施業」と呼ばれる逆算方式（バックキャスト）の施業を新たに導入します。

木材生産林 標準型

- 目標径級40～50cm程度
- 立木本数400本/ha程度
- 林齢の目安90～100年生（※30～40年後）
- 木材生産に資する林木が生育
- 下層植生が十分に存在



木材生産林 長伐期型

- 目標径級80cm程度
- 立木本数150本/ha程度
- 林齢の目安130～150年生（※70～90年後）
- 大径木生産に資する林木が生育（有用広葉樹を含む）
- 階層構造が発達



針広混交誘導林 スギ・ヒノキ型

- 当面の目標径級80cm程度
- 立木本数150本/ha程度
- 当面の林齢の目安130～150年生（※70～90年後）
- 健全で大径な林木が生育（有用広葉樹を含む）
- 階層構造が発達



針広混交誘導林 混交型

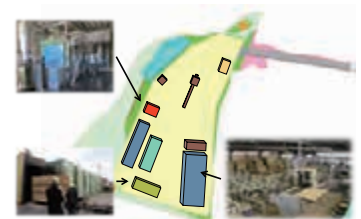
- 当面の目標径級50～60cm程度
- スギ・ヒノキの立木本数50～70本/ha程度
- 当面の林齢の目安160～180年生（※100～120年後）
- 階層構造が発達



ポイント4：木材生産・流通の低コスト化

タワーヤードなど架線系集材の導入を検討し、地形に応じた効率的な作業システムを導入します。さらに作業システムと連動した林業用路網を計画的に整備します。

中核製材工場の稼働を契機として山からの原木直送体制の構築など、流通コストの削減を図ります。



ポイント5：森林保全のルールの新規設定

急傾斜地、河畔林・湖畔林、0次谷など山地災害等の防止において重要なエリアを設定し、それら山地災害等防止において重要なエリアを保全します。さらに大規模皆伐に関する上限面積を設定します。

ポイント6：森づくり人材の育成

豊田市の森づくりを担う人材像（森林施業プランナー、森林作業員、市フォレスター）を設定し、岐阜県立森林文化アカデミーなど国内外の林業教育・研究機関と連携しながら、森づくり人材の育成を図ります。これにより、限られた労働力の中で最大の成果を出すことを目指します

